

第94回 みんなで作る音楽会 案内

日時：12月10日 水曜日 13:15 から 16:00

場所：公民館 114 室 7315

バイエルン国立歌劇場 2023 シュトラウス喜歌劇「こうもり」

今回は、年末恒例のオペレッタ「こうもり」を見てみましょう。

ばかばかしい筋書きですが、シュトラウスによる纏綿とした情緒と活気に溢れた音楽に彩られた艶笑劇。年末の風物詩になっています。とにかく、楽しんで年末を過ごそうという企画なのです。去年は、カルロス・クライバーの名演を見ましたが、今年はバイエルン歌劇場管弦楽団創設 500 年を記念する豪華な公演です。

世界の多くの人が楽しんでいる舞台を我々も、一緒に楽しんでみましょう。

そして、例会の後は忘年会を実施します。場所は阪神芦屋駅の南、インド料理 アンビカ ダイニング&Bar で、

【アジアンコース】ナン2種+カレーをメインにインド風つくね・タンドリーチキンなどお酒と好相性の一品も楽しめる満足プラン！
100 分飲み放題付 3,500 円



1. 喜歌劇「こうもり」

13:15-15:15

演出：バリー・コスキー

出演：ゲオルク・ニグル（アイゼンシュタイン）、
ディアナ・ダムラウ（ロザリンデ）、
アンドリュー・ワッツ（オルロフスキー公）ほか
指揮：ウラディーミル・ユロフスキ

収録：2023/12/28、31



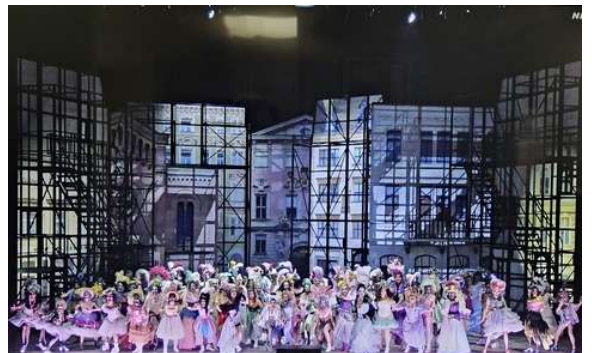
舞台は一見、ウィーンでよく見慣れた典型的な街並みだが、よく見ると建物に「Juden Platz」と言う標記が見える。こういうちょっとしたところに、さりげなく

コスキーのこだわりが提示されるので見逃せない。「Juden Platz」はリング内北寄りにある広場で、google map で見ても、この雰囲気セットにしているものと確認できる。そこには小規模のユダヤ博物館もあるが、なによりも近年になって設置された長方形のホロコースト記念碑がアイコンになっている。ちょうどこの舞台中央のベッドがまさにそれを暗示させるので、アイゼンシュタインは裕福なユダヤ人という設定のようだ。思えばナチスが勢力を増して行く直前のワイマール共和政時代には当たり前だが裕福なユダヤ人が自由を謳歌していたのだ。それが 10 年かそこから悲惨なホロコーストの運命に見舞われ、人間らしい生活を奪われることになる。2024 年の現在、イスラエル国家は同じような酷い仕打ちをパレスティナに対して行っているが、人間はどれだけ愚かで忘れっぽいのか。ネタニヤフ首相率いるイスラエル政府の行っている虐殺行為に対する我々の評価と、ホロコーストを体験したユダヤ人への人類愛的なシンパシーとは全くの別物である。

願わくば、自身のユダヤ的アイデンティティを前面に出すバリー・コスキーがイスラエルの覇権的国家主義とは無縁であることを祈るばかりだ。



Google map : Juden Platz, Wien



序幕は舞台（広場）中央に置かれたピンクのベッドで眠るアイゼンシュタインが見た夢として描かれるようだ。ベッドが建物の部屋の中ではなく、なぜか建物の外側の広場の真ん中に鎮座しているのが、そもそも非現実の夢らしい設定。部屋のベッドで寝ているはずなのに、見えているのは外の広場側、というのがそもそも奇妙な夢であることを暗示している。



二幕のオルロフスキの夜会は、コスキーらしい派手派手でファンタスティックなメイクとコスチューム。コスキー節炸裂で見た目鮮やか。O.シェンク版至上主義者には、ちょっとついて来れないだろう。それでいいのだ。

イーダのスタイルと衣装が 20 年代風で華やか



もはや男も女も関係なくキラキラのラメの眉毛にあご髭。ついて来れなくて当然です。

オルロフスキのカウンターテノールは見た目ほどの強烈さは感じず。



バリー・コスキーらしい夜会の派手さがよく出た舞台。

三幕 フロッシュはなぜか 6 人組で、うちひとりが延々とタップダンスを踊る。



三幕 刑務所長フランク役のマルティン・ヴィンクラーが今回のコスキーの最大の犠牲者(笑)。裸にハイヒール、乳首にキラキラの飾りを着け、小さなパンツの中から鍵の束やら大きな鍵やらを取り出す。今回のスラップスティック的コメディの体当たりの演技は更に磨きがかかっていた(笑)。いまやバリー・コスキー的世界観の最大の体現者だろう。

三幕、鉄骨構造むき出しの装置は、90年代中ごろにベルリン・コーミッシェオーパで観たハリー・クプファー演出の「こうもり」によく似ていた。

配役

【女性陣】 まずはロザリンデのダムラウが流石。役柄とオペレッタを理解した演技と sop 表現はピカイチで、ともすると主役をアデーレに持っていかれがちの処を誰が主人かを魅せ付けた。年齢具合もフィットしている。

アデーレのコンラディも見栄え、演技とも良かったのですが、個人的にどうもこの役があまり好きになれない。

【男性陣】 アイゼンシュタインはバリトンのニグルで'おちゃらけ'気配を上手くこなした。やっぱりバリトンでしょうアイゼンシュタインは。

フランクのヴィンクラーは驚きの一言。まずお堅い刑務所長らしい演技と身なり(一幕)で、メチャクチャな仏語も面白く(二幕)、最後にストリッパーシーン(三幕)だからびっくり。オルロフスキー公爵にカウンターテノール(通常はメゾソプラノ)のワッツを使ったのはジェンダーレスのキーでもあった。(舞踏会のメンバーも男女の見分けしづらさを作っていた) 歌声と演技は何の問題もない。

アルフレードのパニカーは役柄にとっても合っていた。程良く抑えたテノールも良かった。ファルケ博士のブリュックは落ち着きと洒脱なお笑い感が良かった。役柄から言ってコメディアンになる必要はない。

音楽

もちろん指揮は音楽総監督を務めるユロフスキで、まず序曲は軽快さの中にアゴーギク(演奏においてテンポやリズムを意図的に変化させることで行う、音楽上の表現の一つ)を入れメリハリを付けていた。全体としても歌劇のバックらしく抑え気味な流れにピークは大きく鳴らしてコントラストはあった。

オペレッタらしさに今の時代のちょっとした過激さで楽しさ溢れる 'こうもり' になった。ソリスト陣もフィットして、楽しめた。

ベストキャストはロザリンデのダムラウだ。今回の華やかな楽しさを牽引した。

風刺表現では"ジェンダー"は色々感じたが、"ウィーン"は第二幕ラストで背景の街が崩れるくらい、"ブルジョア"に関してはあまり感じる処はなかった。

以上